

アポイ岳再生の取り組み



カムバック 1952 アポイ岳再生委員会



はじめに！



高山植物の宝庫として有名なアポイ岳は、今からちょうど60年前、国の特別天然記念物に指定されました。それ以来、アポイ岳の高山植物は、地元様似町をはじめ多くの登山者に親しまれてきました。しかし、アポイ岳の高山植物群落は急速に衰退しつつあります。このパンフレットは、こうした現状を伝えるとともに、アポイ岳で行なっている再生活動や、これから行なおうとしている活動について広く知ってもらうために作成しました。

アポイ岳の自然



アポイ岳は標高が低いにもかかわらず、さまざまな高山植物が生育します。これは、山全体がかんらん（橄欖）岩という特殊な岩でできていることと、アポイ岳周辺の厳しい環境条件が強く関係しています。かんらん岩に多く含まれるニッケルやマグネシウムなどの

成分は植物にとって有害で、土壌が少なく乾燥しやすいことも加わって、樹木の成長を妨げます。また、海に面しているため、一年中風が強く、夏は海霧のせいで気候が冷涼で、高山と同じような環境になっています。特に稜線ではこうした傾向が顕著で、冬は積雪が飛ばされるので植物は厳しい寒気にさらされます。このような厳しい条件は森林ができるのを阻む一方で、我慢強い高山植物に有利になります。アポイ岳で稜線沿いの狭い範囲に高山植物の分布が集中するのはこのような理由によります。

アポイ岳の高山植物には、ヒダカソウやアポイカンバをはじめとしたアポイ岳の固有種や隔離分布種など、希少なものが数多く含まれています。固有種（変種や品種を含む）は、かんらん岩という特殊な環境に入り込んだ植物が長い



かんらん岩

時間をかけて適応したものと考えられます。別の見方をすれば、植物にとって姿かたちを変えなければならぬほどかんらん岩の環境が厳しいことを表しているともいえます。文字通り世界中でアポイ岳にしか生育しない植物たちであり、このような植物が数多く生育する**アポイ岳の自然は、地元だけでなく全国レベル、世界レベルで重要です。**

※様似町一円はアポイ岳ジオパークとして日本ジオパークに認定されています。ジオパークは地球活動遺産を主な見どころとする大地の公園です。



ヒダカソウ



エゾキスミレ



アポイタチツボスミレ

むかしのアポイ岳のすがた



1968年のアポイ岳



2009年（現在）のアポイ岳

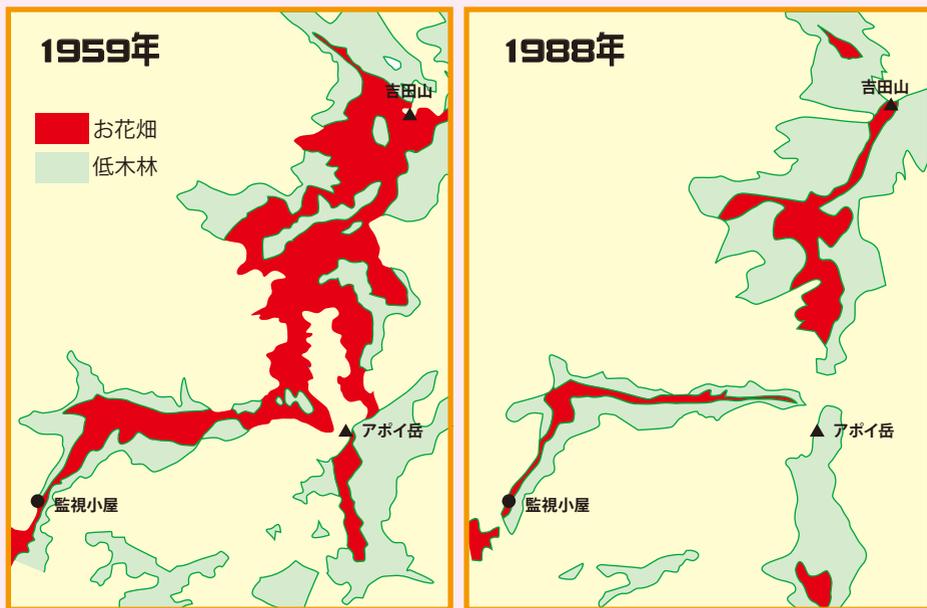
2枚の写真はどちらも5合目避難小屋からアポイ岳の山頂方面を撮影したものです。左は1968年、右はそれから約40年後の現在のもので、2枚の写真を見比べると、現在の方が明らかに黒っぽく見えます。これはハイマツやキタゴヨウなどの針葉樹が大きく成長したことによります。アポイ岳一帯で見られる針葉樹の成長が、高山植物の生育できる面積を狭めているのです。

ずいぶん、ちがうね～



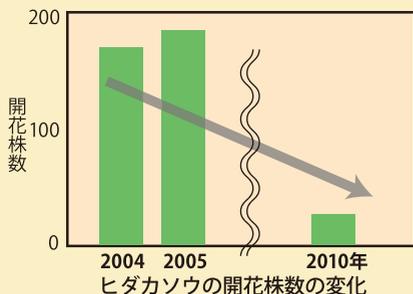
急速に減っている高山植物

しかし、現在、アポイ岳の高山植物群落は衰退しつつあります。**アポイ岳の固有種ヒダカソウは、登山道沿いで見られる開花株の数がわずか数株にまで減少し、絶滅の危機が間近**に迫っています。また、高山植物群落の面積も急激に縮小しています。それに伴って、他の多くの高山植物も数を減らしていると言われています。



1959年と1988年のお花畑の分布の変化

※北海道庁（1990）渡邊原図を元に作成



2005年ごろには200近くあった開花株は、現在では全域でもわずか30株ほどまで減少しています。絶滅の足音が忍び寄っています。

たいへんだ～



※データ提供：北海道・道総研環境科学研究センター

どうして減ってしまったの？

アポイ岳の高山植物群落の衰退の要因として、**盗掘（違法な採取）、ハイマツなどの繁茂（植生遷移）、エゾシカによる被食圧、登山者による踏みつけ（オーバーユース）、地球温暖化**が挙げられています。



盗掘跡



増加するハイマツ



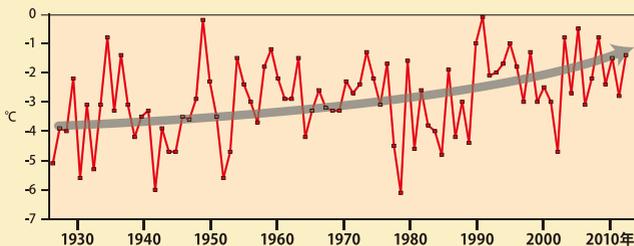
高山植物を食べるエゾシカ

例えばヒダカソウでは、過去の盗掘で非常に大きなダメージを受けています。盗掘によって大きな開花株が失われると、将来にわたって作られるタネも大きく減るので、見かけ以上の悪影響が及びます。また、わずかに残っていたヒダカソウの群落もハイマツの繁茂によって衰退しています。一方、アポイヤマブキショウマではエゾシカによる被食で衰退している様子が見られます。このように、衰退の要因は高山植物の種類によって異なることが考えられます。また、アポイ岳一帯のハイマツやキタゴヨウなどの増加には、地球温暖化が関与している可能性も指摘されています。



登山者によるストックあと

浦河町の2月の平均気温の変化



※アポイ岳に近い浦河測候所の気温データを元に作成

いろんな問題があるね



アポイ岳の再生にむけて

このような状況に対して、さまざまな対策を行なっています。**アポイ岳ファンクラブ**らが中心になって、**パトロール活動や登山道整備**（ロープなどによる管理）を行なった結果、盗掘や登山者による踏みつけは以前に比べて少なくなりました。



登山道整備



登山者へのお願いの看板

また、**研究者らによる高山植物群落の減少などに関する調査**が行なわれ、状況の把握が進められています。2006年には『カムバック1952アポイ岳再生委員会』が立ち上がり、王子木材緑化株式会社の協力も得て5合目に再生試験地を設け、再生手法の検討を行なっています。

『カムバック1952アポイ岳再生委員会』は、**特別天然記念物に指定された1952年当時の姿に再生することを目的**として、地域の住民や



研究者による高山植物調査



酪農学園大学とアポイ岳ファンクラブによるエゾシカ調査での防鹿柵による実験

団体、研究者、様似町等により、2006年に設立されました。関係者が一体となって"花の山アポイ"を復元するための再生活動に取り組んでいます。



再生試験地での地はぎ作業



再生試験地での除草作業

再生試験地は、アポイ岳の5合目（天然記念物境界のすぐ外側で、王子木材緑化株式会社の社有林内）に設けられています。かつては草原だった疎林地に4m×50m区と10m×10m区が作られ、地はぎやササ刈りのほか、高山植物の播種や苗の植栽、除草を行なっています。また、それぞれシカに植物が食べられないよう柵を設置しています。



再生試験地の防鹿柵

このほか、再生試験地のモニタリングを行ったり、地域の住民等に対して啓発活動を実施したりしています。



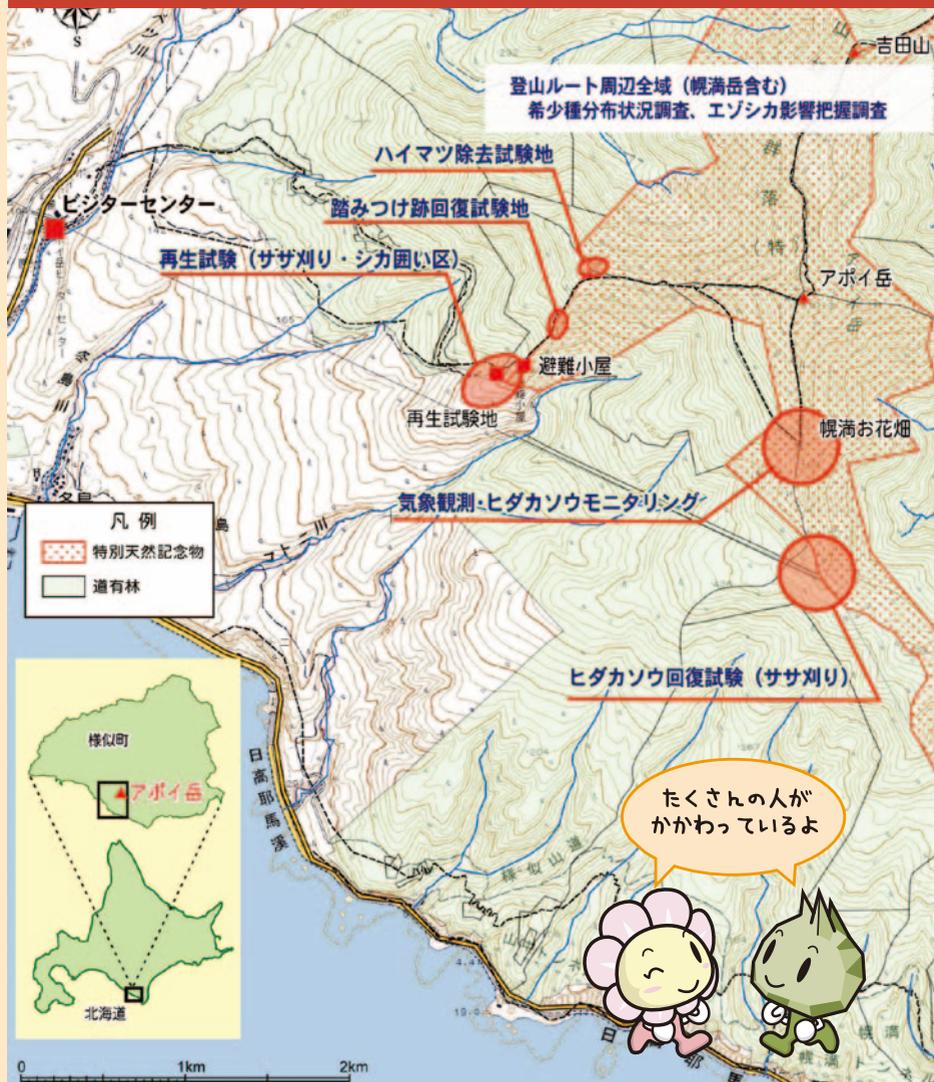
アポイ岳再生委員会



試験地のモニタリング



アポイ岳再生活動マップ



アポイ岳再生の取り組み

2012年11月発行

- 製作：カムバック1952アポイ岳再生委員会
- 協力：椴似町・北海道・道総研環境科学研究センター
- 編集・デザイン：株式会社さつぼろ自然調査館
- 写真・イラスト提供：田中正人・岡部鉄郎・車田利夫

かんらん岩の妖精「カンランくん」とサマニユキワリの妖精「アポイちゃん」は、アポイ岳ジオパークのマスコットキャラクターです。

このパンフレットは環境省の自然再生活動支援事業で制作しています